老農船津伝次平と西洋農学

島根大学・内田和義

鳥取大学大学院・中間由紀子

明治 10 年代から 20 年代にかけて，中村直三，奈良専二，林遠里等の老農が活躍する。そのためこの時代を老農時代と称することがある。彼らに活躍の場が与えられたのは，明治初年に始まる政府の勧農政策（西洋式大農経営の導入）が失敗に帰し，在来農法の見直しがすすめられたからであった。船津伝次平もまたこのような時代に活躍した老農の一人である。

明治 10 年（1877），内務卿大久保利通に見出された船津伝次平は上京し，内務省御用掛となる。翌年 3 月からは駒場農学校勤務となる。彼が書き残した日記（註 1）によると，駒場農学校での仕事は農場の管理，訪問者への応対，農事質問への手紙による応答，地方での農事講演と農事改良の指導，政府関係者の地方視察への随行などであった。しかし船津の業務で最も重要であったのは学生に対する日本の農業に対する教育であった。船津は農場で実習を担当し，教室で日本農業の講義を行った。時間外にも学生が質問にきたが常に懇切に応答した。老農船津伝次平は伝統農法を体系化し，それを駒場農学校の学生に教え手渡すということによって近代農学の成立に貢献するのである。彼らは船津から継承した伝統的な技術体系を基に，そこに西洋農学を接合させることによって日本の近代農学を成立させる。（註 2）

しかし船津は自らの経験的知識を一方的に与えるばかりではなかった。彼は他から学ぶということも忘れなかった。駒場農学校で外国人教師と私的にも公的にも交流した。農事試験場時代には若手の研究者とも積極的に交流した。こうした交流を通じて老農船津伝次平は西洋農学と接触する。

本報告の課題は，老農船津伝次平が西洋農学に対してどのような態度を取ったのかを明らかにすることである。また態度を決定するのに重要な役割を果たすことになる彼の自然観も考察の対象としたい。

管見のかぎり，船津伝次平の西洋農学に対する学問的態度と，その自然観とのかかわりを考察の対象とするのは本報告が最初である。

註 1．「日記」船津伝次平筆，明治 12 年，船津家所蔵。
　　「日記」船津伝次平筆，明治 16 年，船津家所蔵。

註 2．日本の近代農学の成立に船津伝次平が如何に貢献したのかについては別稿を用意している。